

英語使いの英語の感覚

10月5日（木）NHKの「SONGS」を見ました。

今回は、小澤健二さんでした。

デビュー当時、あまり関心ないアーティストでしたが、1968年生まれで、自分とよく似た世代を生きている方で、ほんのちょっと興味を持っていた。

平成に入ってから「渋谷系の王子様」として、音楽、ファッションと多才で紅白歌合戦にも2度出場している。1998年頃から生活の拠点を海外においた。

そんな彼が、当番組に出演した。（出演の詳細はNHKのSONGSのページに出ている）

番組の中で、日本人の英語について述べていた部分があった。

彼の奥様は、確か、英国と仏国の親から生まれた方である。そんな奥様が、日本人の英語について話していたことを紹介していた。

従来からある日本人の英語観で、新しいものではなかったが、その表現がよかった。

以下、記憶に残っていた内容である。

- ・NYへ日本から来た優秀な方が、私（奥様）と会話ができない。
彼らは勉強ができ、英語の成績も完璧であるがため、会話も完璧を目指してしまう。
ちょっとしたミスが、減点となり、100点満点でなくなるため、会話を躊躇してしまう。
結局話すことができない。
- ・外国語は減点方式ではなく、加点方式のものである。
何か1つ話すことができたら、コミュニケーションがぐーんと広がる。
まさに加点なのである。
外国語は、成績が完璧でない人たちのために、なんでもいいから1つできたら（加点できたら）コミュニケーションが大きく広がるようにできているのである。
だから、NYで、英語の成績が完璧でない方でも十分に私（奥様）とコミュニケーションができてい
る。
- ・昔から、言葉が通じないもの同士、小さな加点を重ねながら、コミュニケーションを広げてきた。

さあ、小学校で中学年の外国語活動が始まります。

先生方は、今後指導に慣れてくると従来からの我が国の「英語教育」の戻らないようにしてもらいたいものだ。どんどん口を動かし、まちがってもいいから、加点しながら積極的に話そうとする子供を育成してほしい。興味が出れば、ほっておいても読んだり書いたりする。

将来は、学歴に関係なく、多くの方が英語を使うようになるだろう。つまり、英語が単なるコミュニケーションの道具になるはずだ。